都林泉名勝圖會

一 乾

Miyako rinsen meisho zue
754
.M41
v.1

山水乃里て草木乃枝
葉に流れうるほしめ草木
あまて山水乃風景を
らそほ是とのたまふ
勝景又繁くや以画

かくてしはしやすらふ山水
のたのしみは人にしられぬや
ゆくさとにくゝ見ぬるを里
津にあるさとはすいくに
秋里籬島なといへるあるしの

花洛林泉をしるさまほし
きとしく書画よりてさしめ
すれ故実由縁をくはしくて
しく書つらねかきつけては
都の人をはしめ遠の境及

みえ見え侍るにつゝぬさところ清
もゝ飛雨なれハ炎焼光幼
し車馬能ハぬをさ里なる
居すつら江幽邃乃風景を
見て筆のつゐまきもの秘

れもしてあはさふちをえ世の
こ顔まゝもれおかつきうぬ
雅致なりける積附文帝れ
兼林園を心よ會する
ところハ何そかならんし覧

遠きにあらず翳然たる
林水の流れに濠濮間
の想有事也のなまじいに
これをおもひよれる哉し
彼圖會をはかるに此冊奴第

也なしき同好の人をひろ
見あらはすかるべきひに
於もむくをほ小見なるめん
とゝおもひよらして写されし
ま見やゝつるの感しまぬ

流ぬなりし言葉は
かいつ定行
寛政をとゝめて
ひと都の春

藤波二位季忠卿

氷竹居主人書

凡例

一 此書ハ前板築山庭造傳を基として京師四方名庭并林泉を撰て郭外に都林泉名勝圖會と題す書を撰れども宮殿臺榭山閣水亭蝸舎蓬戸の林泉あるハ頗多し餘ハ他日縁を需て巡覧し後編に備ふ

一 諸寺方丈書院の名画名筆又ハ什寶蟲干の體相并大畧を書せバ其寺院の荘厳京師の美観を撰といへども際限あらざれバ奥に記さる事纔かにして餘ハ寺僧に乞て詳に尋へし

一 勝地によりて風流の圖あり強林泉に寄ざれども其地の風景を彰さんためなり又典故の繪あり是も右に准ず所謂紫野若草伏水梅渓河合納涼高雄紅葉大堰川三船等のたぐひなり

一 林泉に古人の詩歌寡し故に今時京師に於て名家の詩歌を乞需て多く圖中に釘す其中に作者自筆の詩歌もあり誹諧狂哥も亦これに准ず

一畫工ハ一筆にあらざれバ圖毎の印章各姓名あり是を以て画師を詳に知べし

一庭造の法則あるハ側の亭宅を除き画くまれハ林泉の規範となるべきの料なり法則兼ぬるハ舎屋を圖し風景を専とし又四季折々の花樹有るハ大略一二樹を以て志らせん爲に時節に寄らずしてこれを画くものあれバ梅櫻蓮楓あるの類也

一法則にかゝはらず遠景を收庭中ハ都て其遠景を圖し遠景不用意の庭ハこれを省く又圖毎に人物の画れ小大あり其ハ貌の小大によりて林泉の廣狹を志らしむべきなり

都林泉名勝圖會巻之壹

目録

神泉苑　七夕蹴鞠　相國寺
鶯宿梅　什寶　紫野薬草摘
雲林院御遊　紫野　雲林院
大德寺　大雄殿　演法堂
土地堂　祖師堂　經藏
鐘樓　浴室　敕使門
明智門　寢堂　三解脱門
方丈　雲門菴　起龍軒
金剛軒　看雲亭　明月橋
官池　梅橋　古巖松
瑞雲亭　達磨峰　什寶虫拂圖

○塔頭繪様
大用菴
養德院
興臨院
總見院
天瑞寺
高桐院
金龍院
芳春院
清泉寺
梅岩菴
常樂菴
紫式部碑

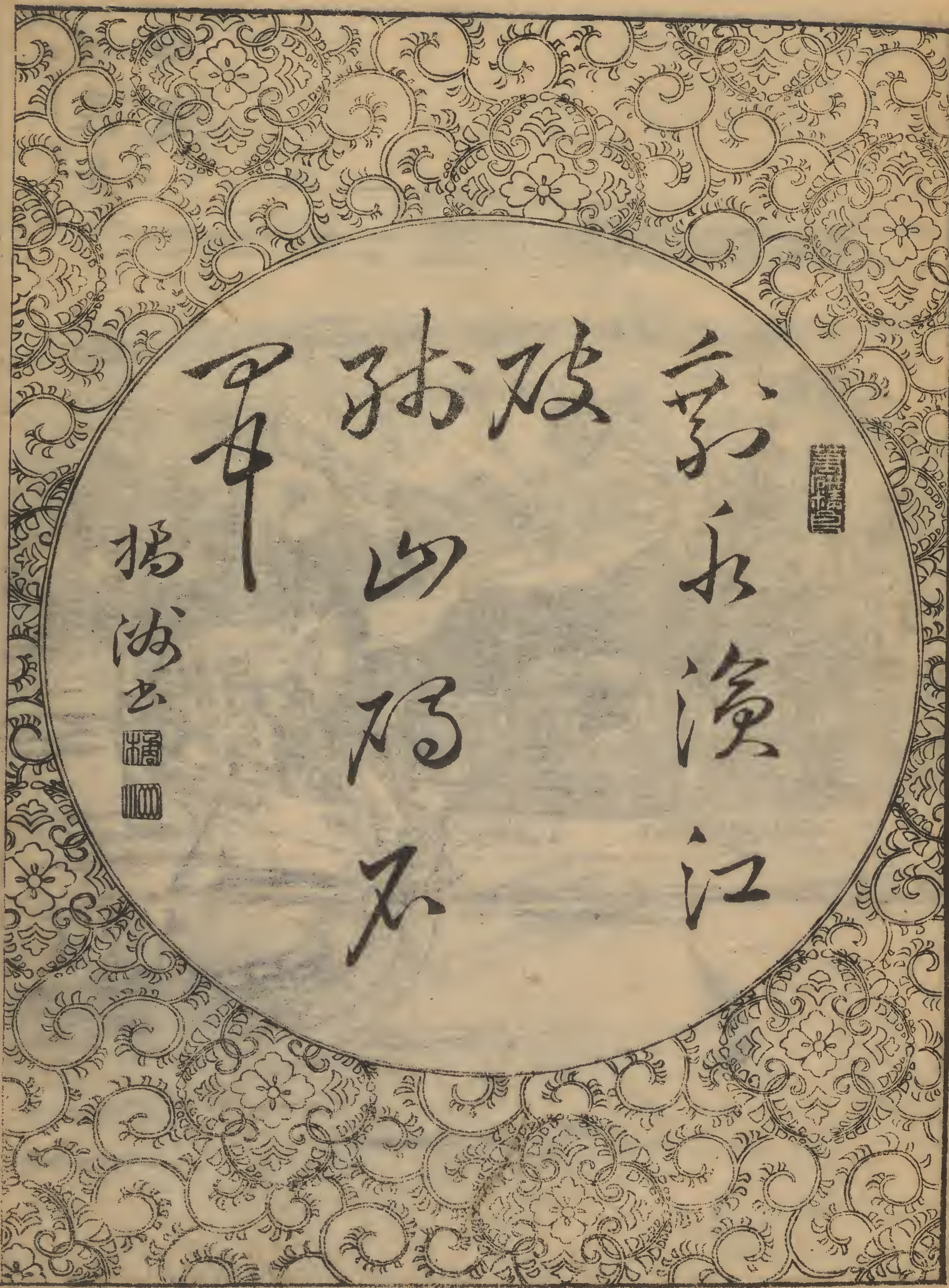
德禪寺
松源院
竜源院
瑞峰院
黃梅院
正受院
玉林院
昌林院
○寮舎
瑞源院
高林菴
孤蓬菴
龍翔寺

如意菴
眞珠菴
大僊院
聚光院
三玄院
大慈院
大光院
龍光院
龍泉菴
寸松菴
見性庵
碧玉庵
碧玉松
引接寺

本法寺
千本焰魔堂大念佛
十九箇條傳授
土地堂
大悟堂
赤松圓心塔
蛭子社
榮西禪師揚鍾圖
靈洞院
四條河原納涼
眞如院
眞如水
七夕菴花

什寶
池坊
建仁寺
開山堂
鎭守
當山十景
十日蛭子詣
正傳院
祇園一宮
戲場顏相見
瓜實燈籠
西本願寺
盆ノ燈籠

巴庭
七夕立花
佛殿
方丈
無盡燈
扁額
畫墨蹟掛虫干圖
織田有樂茶亭
祇園橋由緣
本圀寺
烏帽子石
林泉
東本願寺



渉成園
釣殿院
遍照心院
圖卝圖
東林院
宝輪院　林泉
山吹岡本氏涌泉
東鴻臚館趾
桂宮
方丈林泉　烏帽子石　磨石
六孫王祭
南谷書齋幻華庵
茶亭
烏石扁額
六條内裏
融大臣旧館
壺寶
實法院蓮池
東寺
御影供詣

都林泉名勝圖會巻之一目録　終

神泉苑御遊

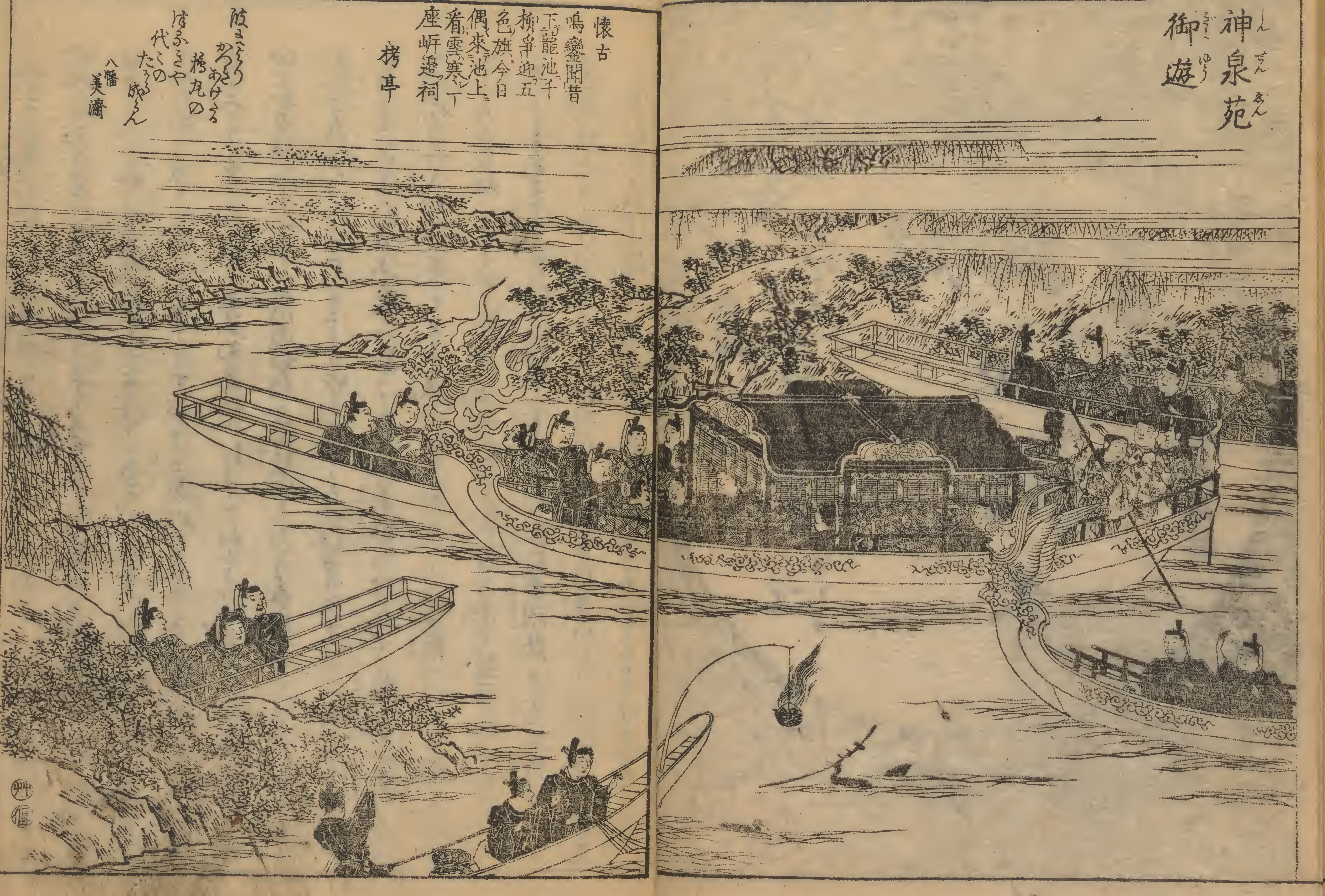
懐古

鳴鑾聞昔下龍池千柳争迎五色旗今日偶來池上看雲寒下座峙邊祠

栲亭

波まくらかへるあけさる鶴丸のはふきや代々のためしなるらん

八幡 美濟



清少納言の枕の艸紙に云九月ばかり夜一よふりあかしつる雨のけさは
やみてあさ日の花やかにさしたるにせんざいの菊の露こぼるばかりぬれかゝりたるも
いとをかしすいがいらもんすきなどのうへにかいたる蜘乃すの
こぼれのこりたるに雨のかゝりたるがしろき玉をつらぬき
たるやうなるこそいみじうあはれにをかしけれ少し日たけぬれば萩などの
いとおもげなるに露のおつるに枝のうちうごきて人も手ふれぬにふと
かみざまへあがりたるもいみじうをかしといひたることどもの人のこゝろにはつゆ
をかしからじとおもふこそまたをかしけれ。兼好のつれ〴〵草に家にありたき
木は松さくら松は五葉もよし花はひとへなるよし八重桜はならの都にのみ
ありけるを此ごろぞ世におほくなり侍るなる吉野の花左近のさくらみな一重に
てこそあれと書れたり桓平安京遷都の初秦川勝が宅を転じて
紫宸殿となし給ひ階下に古梅あれど其後に桜を植られたり 天暦御記 廣后李部王
の家の桜を坂上瀧守 詔を奉て移し植たるまゝを南殿桜 左近桜

いふも此也。御階橘は橘大夫秦保國の後園の名木にて年代ふりて後に天徳
の頃右近將監 勅を奉て植継ありしより右近橘と號く かしこくも
かれさまを都林泉の基ともなるも可ならんや

支本

これ庭やましく庭の奥にさえ祇を得しぬる世の初基　後成

神泉苑は上古封境広くして二條の南三條の北大宮の西壬生の東の地八町の間に
天子遊覧の所乾臨閣を正殿とし次に巨勢金岡石を畳むといふ（拾芥抄）大内裏をうつして
造営ありし時は周文王の霊囿に准じて方八町に作られし泉苑の池より
善女龍王あらはれしより神泉とも号け又其めぐりを洛中に課せて柳桜を
多く植られたり弘仁三年二月に 帝まさに行幸ありて観花の御遊あり
文人におほく詩を賦し禄を賜ふ事差あり 類聚国史 花宴節会まで此時より始る 貞観十二三年
十月鳳凰乾臨閣の東らし鴟尾の上に集る 三代実録 又神泉苑に於て御霊会を
行ひせらる是日苑の四門を開いて都の貴賤を出入し縦観とさせ事なし
聴し又菊宴なる女楽を南の瀧殿に奏し盃をめぐらし舟に奏楽ド

湧ッて圜菀の幄に就く楽を奏じ 内裏式 相撲會ハ少納言大舍人と共に東の瀧口上の橋頭に候しまた貞觀十八年六月にハ疫神を神泉苑に送る是祇園會の濫觴と初春の左義長ハ眞言院より此に出して燒上る也り此時法成就池と號を弘法大師ハ善女龍王を祈りて請雨の法を行ひ天下旱魃の慈を拯て叡感を蒙る小野小町も和哥を詠じて雨を降らし鷺ハ宣旨を奉て五位の爵を賜ハ白河院御遊の附鵜をつくらせて叡覧あるに鵜池中に入て金覆輪の太刀を咥へて上るを其まゝ銘を鵜丸と名付く其外代々の帝行幸ありし事數回ハ中須明德應仁の兵燹に罹て今ハ僅の林泉となる志かハあれど大内裏の遺蹟千載の賜とぞ思ひける

本朝文粋 冬日於神泉苑同賦葉下風枝疎 源順

神泉苑者禁苑之其一也。紅林地廣。呑楚夢於胷中。綠池水高。縮呉江於眼下。戸部省侍郎以下。偷取暇豫于其間。蓋亦禁漁釣不禁吟詠也。觀夫葉隨風下。枝逐日疎。梧楸影下。一聲之雨空灑。鷗鳩背上。數片之紅纔殘。蕭々然颯々然。誠足以感耳目者也。于時短晷已傾。長庚將出。以文會友。暫雖携風月之遊。退食自公。飽難玩林池之妙。恨來暮而去早。請衆興以遺詞云爾

經國集 和海和上秋日觀神泉苑作 滋貞主

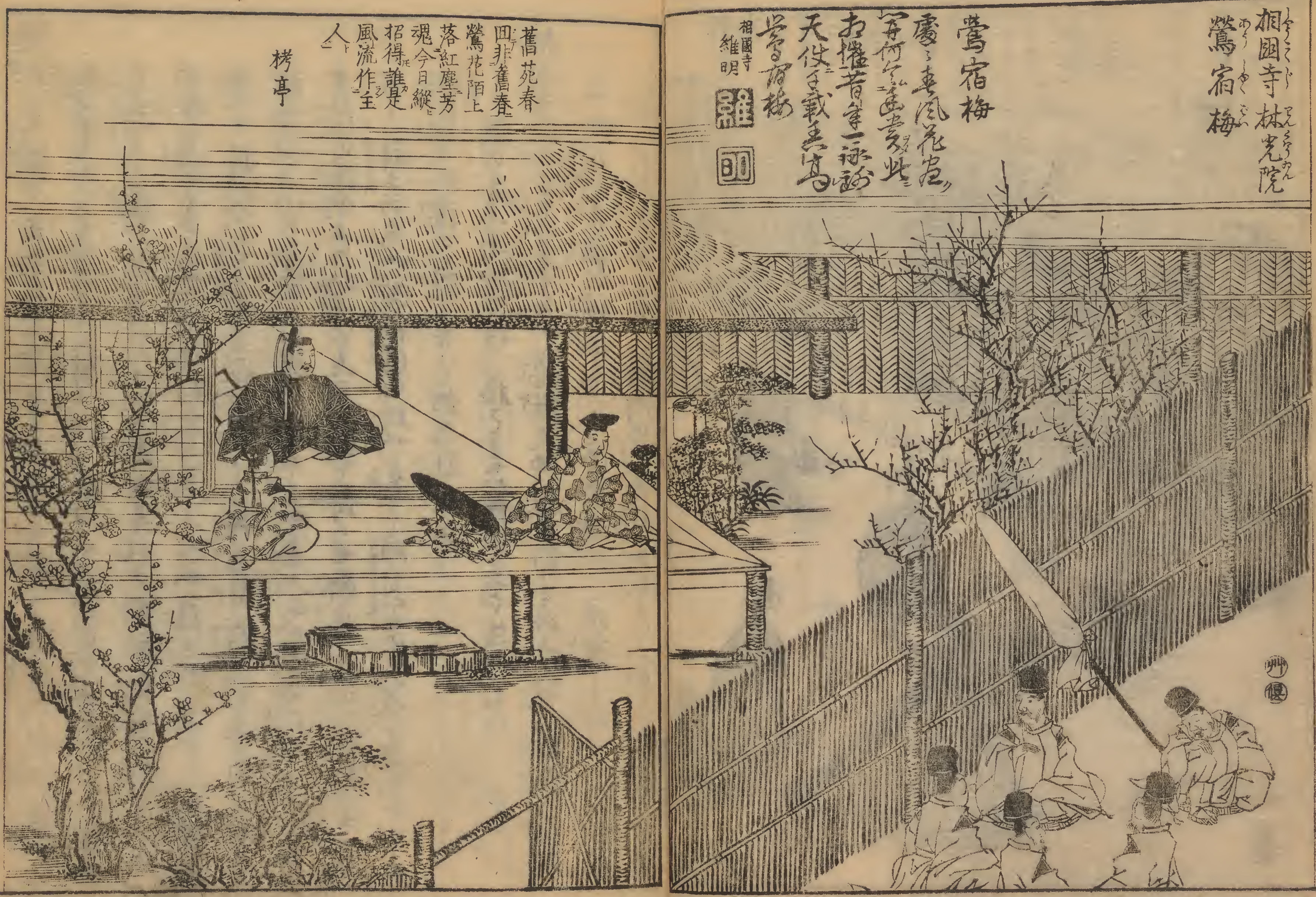
闍梨下自南山幽。勅許令看上苑秋。御路蕭踈楊柳影。遵行直到白沙洲。廻瞻肅殺無紛濁。眼沸清泉一細流。小嶺登攀頻見鷺。暗林拂入欲驚鳩。三明湿照龍池閣。二道重迎秋薰樓。法侶相隨喜樹下。不殊昔與大比丘。

年中行事歌合

ちはやぶる神の泉はそのかみや旱をゆるのそらしる成らむ 宗時

ほれく州 さんちやうと正月にあふるさちやうを眞言院より神泉苑へ出して燒あぐるなり 法成就の池にきさとなやきは神泉苑の池といふ也

七夕（しちせき）
蹴鞠（しうきく）
飛鳥井家（あすかゐけ）に傚ひて
今ふみんは
つとに催を
人々あり
是が中に
高足（かうそく）とる
いつの人
官家ハ
あたをと
人をいへど
これも又
おにあひ
さりとて
おぼえなく
ならつれハ
口号（くちずさみ）ける
久方は天津宮まてまとく
揚まりも
たひあふ星や
あそへからん
岡田子葛蹊


相國寺林光院
鶯宿梅
鶯宿梅
相國寺
維明
維明
舊苑春回非舊春
鶯花陌上落紅塵
芳魂今日縱招得
誰是風流作主人
栲亭

蹴鞠の御遊ハ　用明天皇の御宇廐戸より始りて上宮太子の御徒然を
慰奉らんと雲卿大臣に教へ 壒嚢抄 厥后文武天皇大寶年中内裏に
専ら行はる鞠の神ハ近江志賀郡松本精大明神神躰ハ猿田彦命
の幸魂を祭る初ハ洛陽桂宮に在しを　後鳥羽上皇も此道を
賞じ給ふ今ハ七夕の日恒例として飛鳥井難波の両家に於て
蹴鞠あり此日ハ梶の御鞠とて雲上家参入又地下の門人も来り
書院の椽側にハ種々の名ある鞠を飾らせ鞠庭にハ四本の松蒼々と
して許多の若干紫裾濃の袴を着し両々三々の高低に身をそらし
沓の音斜陽の影に響て都の壮観なり

夫木
鞠の庭に桜柳を移し植て春ハ錦に立や儲しらむ　為家

相国寺ハ上古出雲寺とて傳教大師の草創し給ふ天台の仏刹也永徳
年中足利義満公禅院として夢窓国師を始祖とし妙葩禅師を
二世とし封域に十余あり惣門の額ハ般若林といふ排門を荘厳域
と号け山門ハ圓通といふ仏殿ハ覚雄宝殿といふ仏殿の前の川ハ龍淵水と号
し蓮池を功徳池といひ天界橋ハ其上に跨り輪蔵を祝釐堂といふ洪音楼
ハ鐘楼なりし此鐘ハ南都元興寺の鐘にて中頃鬼神出てさまよふとて撞
り故に人恐れて撞ざりしを義満公の命によりて此寺に掲る 廣戒記
護国廟ハ八幡宮を鎮祭る当山鎮守とぞ塔頭林光院にハ鶯宿梅あり是ハ
むかし西京紀貫之の家にありし梅清涼殿の前に植られんとて求めけるに
貫之の娘おしみてよみたれば其儘かへし給ふ普光院にハ慈照院定家卿の墓
あり松鷗軒にハ法然水ありまたハ原賀茂の神宮寺にして今の百万遍の旧地也
当山開山堂の前ハ林泉あり鴨川の支流にて風色絶妙なりし後に加賀守の
催りしといふ近年大明の画様に擬して林泉荒廃に故に図とする事を得ず　当寺什宝ハ
縄目文殊吾賀の筆。砥平石の讃ハ世に齊昭文殊といふ。常鶴の二幅対並に
士顔の筆。昔唐より渡りし故に所々に伝ふといへり呂輝の芦雁。趙子昂
の墨蹟。松風の鐃鈸。小狐の鐃鈸。太宗皇帝の書。陸信忠筆の十六羅漢。
絶海和尚の十牛の頌。古法眼元信の文殊。其外数百品ありまたハ此に略す

紫野 若菜つみ
伴蒿蹊

紫野
思樂紫野于采
其芹是采是獲
薄薦吾親思
樂紫野于采
其茅曰之
永矣以遊以
以遨以遊
以遨于紫
之野孌兮
諸姫既都
且雅
佐野憲

Poems on trees
Cherry blossoms

紫野 大宮の西方の惣号にて七野の其一なり 延暦十四年十月天子ここに遊猟し給ふ

後拾遺 白妙のとよみてくらをとりもちて祝ひぞ初る紫の野に　長能

續古 祢られじや妻恋すらん下野ゆかり紫野より鹿ぞ鳴なる　太上天皇

雲林院 紫野にあり 淳和帝の離宮也 天長九年紫野に行幸し給ひ陪従文人に令して詩を作らしめ御製の和を賜ふ 其後雲林亭と號して時々ここに幸ありて宴を群臣に賜ふ 頻聚国史 承和十一年八月仁明帝も亦幸ありて 其後雲林院と同帝の皇子常康親王に給ひて殿宅となる 次帝登遐の後親王落髪して遂ここに僧正遍昭に附属し精舎となし給ふ 帝の追福のために毎年安居講を修して勅願寺となる 本堂は親王の居室にして持ちる所の千手観音を安置し 又室也上人もここに住す 則常康親王の御子なるゆへ 又定覚阿闍梨も年久しく此院に籠て 村上帝の勅願として大般若経を読誦せしめ宝塔を建立す 次此日天皇ここに幸し給ふ 雲林院の別当補任は大暦に実性僧都 康保元年に謙徳公伊尹 干時参議従四位下 別当に補せられき 圓融帝永観元年勅して圓融寺を雲林院の側に建給ひ 帝御位を退て圓融寺に寝居ありて崩じ給ふ 其時閑院左大臣追悼の和に

續後拾遺 栄花物語 圓融院の法皇うせさせ給ひて紫野に御葬送侍りけるに一とせ此所にて子の日せさせ給ひし事を思ひ出てよみ侍りける

紫の雲にかけても思ひきや春の霞になして見んとは　朝光

今も雲林院の西のかたに天皇塚とて陵あり 又牡塚の小二町許に塚本の字の地あり これ古き常康親王の古墳なりとぞ 物換り星移りて後醍醐帝元亨四年雲林院の敷地を大徳寺開山大燈国師に給ふ 故に再興に及び大徳寺の子院となる 今はむかしの面影もなく形ばかりの小さき堂の傍刹となる 客殿彩画の一式は狩野探幽斎の筆なり 雲林院も應仁の兵火に燬びたり其後大原に再興へし

六帖 木のもとをふしどとぬるみしかのはうれるは雲の林に紫ぞなる　兼之

名寄 紫なる雲の林をしたふ人は秋ぞ悦ん頼もしかなし　家隆

本朝文粹　扈從雲林院不勝感歎聊叙所觀

菅贈大相國

雲林院者昔之離宮。今爲佛地。聖主玄覽之次。不忍過門。成功德也。侍臣五六輩。翫風流而隨喜。院主一兩僧。掃苔齋以恭敬。供奉無物。唯花色與鳥聲。拜謝有誠。唯至心與簪首而已。予亦當聞于故老。曰上陽予日野遊厭老。其事如何。其義如何。倚松樹以摩腰。習風霜之難犯也。和菜羹而嗽石。期氣味之克調也。況年之閏月。一歲餘分之春。月之六日。百官休暇之景。今日之事。今日之爲。豈非爲無爲事無事乎。予雖愚拙久習家風。迴興有時。走筆無地。聊舉一端文。不加點云爾。謹序

本朝文粹　冬日遊雲林院西洞玩紅葉

江以言

雲林院西洞者。天下之名區也。近世事踐其兆域之者。每至花春葉秋。莫非雲龍風虎。於是左親衞員外次將。請暇霜杖。乘興風情。來遊此間。蓋有以矣。次將槐露以承家。蓬砂以立操。文綵煌煌。漢家之雖黃失色。筆力嶽嶽。唐室之雄伯差肩。于時屬玄英之已半。玩紅葉於其中。自秋及冬。送數日而染出。裏梧老柳。無一枝之遺留。至夫飄飄無數。高下不定。落敷池中。風疊赤光赤色之浪。飛散佛上。霜添曼陀曼珠之花者也。既而當于紅螺之聲忽暮。玄鶴之駕將歸。禮部郎中以言。拜溫官而含歡。對寒林而遺恨云爾。

大德寺　紫野にあり禪刹　龍寶山と號す

龍寶記略云

紺園ハ平安城の乾方紫野にありて西ハ鷹峰に接りて東ハ比叡を俯して船岡を南の界とし賀茂川が北に接して地勢夷曠松檜蔚然として實に禪寂無塵の淨域なりて大燈國師の開く所也宗峰（諱）既に南浦和尚（大應國師）に法を嗣て蹤を洛東雲居寺に止めて後ここに移る檀越赤松圓心則村（同じく則祐）一院を創して大燈國師を請じて參問の緇素日に多く門に塔益を

時に叡山の玄恵法印（又独清軒と号す）其党数人を倡て達磨宗を破せんがため
競来て問難法度数條に逮べ宗峰の機鋒に当る事能はずして
屈服し稽顙して弟子の礼を執、就中玄恵ハ深く禅に傾く事
厚し直に方丈の堂を借て前罪を謝し宗印をもつて者師に帰崇して
諸堂を建て禅刹となし其頃花園法皇勅して入内なさしめ輙
禅要をめして奏対叡慮に愜ひ忽龍床に坐って法を談じ興禅
大燈国師を賜ふ　後醍醐帝礼敬特に深し朝廷第一の祈祷所
として屢禁腋に法座を設け国師を請じ陞座説法あり　天皇自
弟子と称じ投機の偈及び著語等の宸筆を賜ふ　元亨二年
天皇宸翰を染られ本朝無双の禅苑と称す
開山大燈国師名は宗峰字は妙超といふ父ハ播州浦上掃部助入道覚性也
赤松円心の次男季房の女ハ浦上掃部が　筑前博多崇福寺の五世として又但州
覚性の室なり是国師の母なり
祐徳寺を創し建武四年丁丑臘月廿二日遷化五十六歳雲門菴に塔す

○大雄殿　仏殿をいふ本尊釈迦弥勒弥陀　張思恭之筆　初メハ当山二世徹翁和尚
創す応仁兵火の後文明十一年一休和尚泉州堺の宗臣及び尾和
の与源　法名祖渓居士　再興し同年六月落成す又其後寛文六年那波常有
弊陋なりしかバ一新す今の堂是なり

○演法堂　初ハ赤松則祐創す享徳年中両禄の後江月和尚が帰依して
稲葉正勝庚建立す天井画龍狩野探幽筆

○土地堂　伽藍神　梵天帝釈及び大小神祇

○祖師堂　初祖菩提達磨百丈懐海等を安ず
開山大燈国師像を安ず

○経蔵　蔵経は師那波宣旦志して建て
経が蔵て櫃中に蔵む　慶長十六年秋益田玄蕃頭元祥一新す

○鐘楼　銘ハ宗建長言加書す

○浴室　額ハ張即之筆　再興元和八年
京師灰屋紹由志ありて建る

○勅使門　應仁ハ九重の陽明門也　南方正門　寛永十七年　明正帝より賜ふ
勅使来駕の時これより出入す

○明智門　方丈の南にある門なり明智光秀建立　伝云光秀天正年中其君
信長公を弑して自ら令の保ざる事を知て白金千両を
当山に納て冥福を祈る故に
此門を建て其名を呼ぶ

○寝堂　再興寛永七年石州益田玄蕃頭藤元祥再興す法名紹圓
又全斗と号す長門侯に仕へて八千石を賜ふなり此堂
初メの建立の施主
詳ならず

大徳寺方丈
天祐和尚作
比叡

○三解脱門 俗に山門といふ 東西十一間南北六間 額金毛閣 張即之筆 閣上彩画 長谷川等伯筆

本尊釈迦 阿難 迦葉 十六羅漢を安ず 釈迦三尊ハ旧龍翔寺大雄殿の安置仏也 寺宇破壊に及んで当山に移す 十六羅漢ハ千利休の寄附也 今の三門ハ連歌師宗長の建る所也 其後古渓和尚檀越千利休を勧めて閣を門上に設く

金毛閣梁棟銘

帝徳高輝視寿域於万歳
祖風益盛闡法門於無窮
檀越泉南利休居士修造
住山洛北春屋叟宗園誓

春屋慶賀偈云

千門万戸一時開 月斧雲斤功大哉
蹈地金毛高閣上 挙揚臨済話頭来

連歌師宗長ハ宗祇の弟子にして駿州嶋田の人也 柴屋軒宗長と号し 老後今川義元の招請によりて同州丸子駿泉谷に幽居し 享禄五年三月六日没す 八十五才 くハしくハ東海道名所図会に記之 宗長初当山真珠庵を建て其後諸堂を経営して悉く備ハりいまだ山門成ず 宗長云 連歌五十貫と謂し費用に為 一とかさねの秘蔵の珍宝定家卿真跡の源氏物語と鬻く 厥功を遂らるなり

○方丈 初め雲嶽法師建る 應仁兵火の後 紹鎮南の宗縁及び寿源等 方丈厨を建る 寛永十三年京師後藤益勝 方丈の狭陋あるをもつて新に大方丈を造る 旋題古方丈の額を掛しく 庫院とし方丈の額 瑠璃郡之筆

○客殿ノ襖 墨絵山水 狩野探幽筆

○雲門庵 開山大燈国師の塔所也 方丈の内にあり 額に曰 霊光 初めの額ハ後醍醐天皇宸翰 享禄中に焼亡 今揚る額ハ後土御門帝の宸翰也 花園法皇御髪塔あり 法皇詔によりて御髪を小塔の中に納め霊光塔に安ず

○臥龍軒 方丈の乾にあり ○金剛軒 僧堂の南にあり ○看雲亭 方丈の巽にあり

○明月橋 仏殿と法堂との向にあり

○宮池 明月橋の東にあり 伝云 後醍醐帝当山に遊遥し給ふ時 此所をめぐらし指点して国師に宣ふ 此地正に一池を開く可しと 国師勅命にしたがひ池を穿つ 故に宮池と名付く 又五老松を植ゑあり 宮池の北五松の大樹なり

○梅橋 古梅ありて宮池に横たへ橋を架す 故に名とす

○古巌松 蟠松已に枯れて其所を継ぐ 今方丈南庭の松 最秀可し故に古巌と名付く

○瑞雲亭 山上にあり 僧堂の南金剛軒の

○達磨峰 未詳何峰 或云 指比叡山 是風来にして当境たる あらゆる所之 以心境相対論之 右雲門庵已下の十名ハ大徳寺の十境とぞ

大德寺什寶虫干曬掛圖

運庵虚堂南浦三祖自賛ノ畫像　三幅
大燈國師像　一ハ自賛　一ハ後醍醐帝御賛　二幅
大燈國師投機ノ頌　一幅
大燈國師垂向後醍醐帝下語　両筆　一幅
後醍醐帝投機頌　一幅
大燈國師傳衣遺屬ノ語　一幅
大燈國師遺偈　一幅
大燈國師與徹翁ニ印證　德禪什物　一幅
同　與徹翁號　同　一幅
徹翁和尚與言外ニ號　同　一幅
同　遺誡偈　同　一幅

徹翁大祖正眼禪師號　同　一幅
徹翁天應大現國師號　同　一幅
大燈國師親写傳燈録　合為十五冊　卅卷
徹翁和尚親寫條渉録　德禪什物　一卷
同　写舍利記　一卷
後醍醐帝宸筆朗詠　一卷
大燈國師菩提講敷地證文　雲林院志中ニ在　一幅
同　草書簡　二幅
中正藏主草書簡
古幢和尚草書簡
大德寺南禪等位年號勅例　菊亭右大臣
虚堂墨跡寄附之記證

虚堂達磨忌拈香之墨跡　桑山果法院寄附　一幅

虚堂書簡　一幅

同像　墨西澗筆　行右帆贊　一幅

佛眼像　自贊　一幅

後水尾院宸筆和歌　二幅

大燈像　一条院眞敎親王筆　一幅

観音像　月壺筆　一幅

観音龍虎猿鶴　牧溪筆　五幅

十王像　陸信忠筆　十幅

十六羅漢像　兆殿司筆　十六幅

五百羅漢像　禪月等所画　總見院什物　百幅

右ハ鎌倉寿福寺の什物也其後相州小田原北条の手ニ入瑞溪寺ニ安置ス小田原北条亡びて後秀吉公取上之ヲ京師大仏殿の寺宝と成大仏殿ニ古溪和尚所ニ創ス故ニ總見院什物となる今方丈ニ存スを已上龍宝誌大意

徹翁像

綸旨

綸旨

同遺誡偈

[illegible]宸翰

徹翁號

正印禪師號　言外へ

同遺偈

言外號

正眼禪師號

印可状

大現國師號

勅使問

虚堂墨跡[illegible]

虚堂[illegible]

持明院宸翰

五山綸旨

元弘三年宸翰

開山遺偈

建武元年宸翰

元弘四年綸旨

雲門庵

開山像 自賛

後醍醐天皇宸翰朗詠

方丈 卓ノ上

運庵像 自賛

大應像 自賛

開山像 自賛

虚堂像 曇西洞賛

佛眼像 自賛

禮間

同

同

開山墨跡

三百年忌綸旨

再興綸旨

吹挙状綸旨

後醍醐帝投機頌

開山示後醍醐帝法語

宗也乞心頌

開山投機頌

法衣附傳語

菩提樹讃證

祈願所綸旨

高照所附綸旨

○龍光院名畫墨蹟掛麗之圖

鳳 富
凰 士
文殊 探幽

四幅対 大松 探幽

三幅対 山水人物 同
山水人物 王晋卿
山水人物 同

子昂三行墨蹟

葵 舜擧
菊 趙昌
葵 舜擧

王甫 錦昌 雪舟 顔輝
猫 牡丹 双雀 四睡

三幅対 山水 山水 同 夏明遠

五祖 印月江賛
三祖 硯平石賛
初祖 端原叟賛
觀音 月壺
二祖 心笠賛
四祖 逸樵隠賛
六祖 芝霊石賛

本覺禪師墨蹟
利休文ら瓢庵
通圓寺記 江月書
謝寺官帯語 江月書
宗及ら 同書
詩 春偈 墨蹟 江月書
大徳寺 宗達 取名

大燈假名文
宗峰 大燈字
華叟墨蹟

達磨像 大燈國師賛
大燈法語 同書
四祖五祖 傳庵賛
徳山像 宣傳賛
葉底 本知

寒山 顔輝
拾得 同
仁叔墨跡 観音 清拙贊 傳牧谿筆 自贊
一山國師墨跡 一行書 南無慈悲万行菩薩
猿猴 牧溪
布袋 顔輝
猿猴 牧溪
梅 月 同 四明天童 鶴 雪 同 松
山水 玉澗
黙庵 一山
芦雁
上 大

明正院御筆消災咒 一巻
密庵和尚墨蹟 一幅
南浦和尚墨跡 表具ハ小堀遠州作 泉州人伊丹屋宗哲書附 一幅
蘭溪和尚所書金剛經 折本 一部
大燈國師所書濟大川録 二冊
栗 柿 牧溪筆 相阿弥外題有之 菓子の絵ト云 二幅
誠子内親王所書 俊成卿之色紙 一枚
妙吉祥院所書六歌仙 一枚
千利休寄瓢庵文 一幅

瓢庵 まいる 利休

堆朱香合　樹下人形紋大一文字　圓香筥之小堀遠州寄附　一箇

下土茶碗　千ノ利休所蔵宗及傳之　一箇

唐物丸壺茶入　箱ノ蓋遠州書之　丸つほ　一箇

同文琳茶入　箱蓋ハ翠岩珉和尚書　筑紫文琳　袋萌黄宝尽し股子　大通菴　大通菴ハ宗及ガ又津田宗達ガ菴なり　一箇

同　鶴頸茶入　箱蓋ハ江岑和尚ノ筆　鶴頸　唐物　一箇

飛薬瓢箪茶入　箱蓋ハ玄筆あり　瓢箪　江岑　一箇

油滴天目　小　黒ク唐薬ニ白星内外ニあり　一箇

曜變天目　黒ク瑠璃色ノ有星　黄色白色ニ交る　一箇

臺　油滴ニ添　小振菱花形青貝菊文　ホフヅキ内不残朱塗　一箇

盆　丸盆ニ添　黒塗　菱形　外ノ縁曲　足内ニ彫付　天

日ノ字カ

一箇

内赤盆　丸内外朱塗外の縁ニ牡丹。菊。梅。山茶花。以四季彫刻を香臺の内黒塗　一箇

茶杓　宗及作　筒ニ同ニ更ニ他とあり　自筆といふ　一本

当當山の什寶数百品ありといへとも、これを見知せざれバ記すを幸ハず、故に茲ニ畧ス

塔頭繪採

○靈山德禪寺　開祖徹翁和尚諱義亨嗣ニ開山大燈ニ應安二年五月九日寂ス賜ニ天應大現國師ノ號ヲ相傳フ寺前に池あり築山あり山中ニ玲瓏閣竹影閣あり池中ニ舟を浮べて遊覧す今の松源菴徳及び寺前の民家みな是乃靈山の境内也今此書徳の茶座安居院門前の地なり應仁の火災後紫野の隅ニ移して嗣がかの池ハ田畑と成る鍛の宗源再興今三門の東南にあり塔頭寺二位之未日神祠ニ鎮座す

容殿襖　龍虎画　狩野探幽筆

○如意菴　塔ハ密傳正印禪師言外宗忠和尚ニ應安中所ノ創也

如意菴額　後奈良帝宸筆

容殿中之間　墨画山水　狩野古法眼筆

檀那間　墨画西湖ノ圖　同筆

Porch floor near waterbasin

○大用菴 大機弘宗禅師華叟宗曇和尚及び宗曇法嗣大照禅師
養叟和尚の開創也應仁後宗源與滄旧古文の
小ふあり其後松源の門内にうつさる

客殿中間 古法眼筆

禮之間大書院 小栗宗丹筆

○松源院 正續大宗禅師春浦宗熙和尚創之
松源院額春浦和尚筆
昔今松源院客殿是之

客殿中間 墨画花鳥 古法眼筆

禮之間 墨画山水 周文筆

舊客殿中之間 相阿弥筆

禮之間 宗律

○真珠菴 永禄十二年ノ冬以二大用松源一爲二一院一客殿ハ
古への大用也
一休宗純和尚の塔所嗣二華叟一文明十三年
十一月廿一日寂ス八十八歳
永亨年中建應仁の火後宗源一休和尚と心を同じう
しく當山の伽藍及び諸院を營興して次第に成就
宗源等師に請うて此庵を營んと欲す師辞して云先師の
塔所憂くは兵火に焼れぬ我ためなりと
既ッ如意大用等の祖塔皆なし功を繰ッて後一休和尚薪村
酬恩庵に寂し宗源常に志を繼て當寺に移し建て
師の塔所とし方丈の外にあり宗源ハ泉州堺の人
俗名尾和四郎左衛門文亀元年十一月廿日没法号祖溪

客殿中ノ間 墨画花鳥 曾我蛇足筆

禮ノ間 墨画真山水 同筆

書院 卅ノ山水 同筆

檀那ノ間 四皓 長谷川等伯筆

衣鉢ノ間 蜆子猪頭 同筆

何似之額 一休和尚筆

○養徳院 佛心大弘禅師實傳宗真和尚塔所初ハ祇園の
地にあり後世當山に移ス徳禅院の南にあり
○養徳院殿贈從一位左大臣源満詮法名小川殿ト應永
廿八年五月十四日薨五十一歳足利義詮の男義満と同母
の弟なり母ハ八幡善法院通清法印の女なり

客殿中ノ間 芦雁 小栗宗丹筆

禮ノ間 墨画山水 周文筆

檀那ノ間　落彩色 琴碁書画　同　筆

衣鉢ノ間　墨画山水　小栗宗丹筆

南
〇竜源院、佛慧大圓禅師東溪宗牧和尚塔所本山の南にあり東溪の児孫を称しく南派といふ
永正年中能州太守畠山修理太夫義隆造立す此義隆
天正二年家臣遊佐氏が為に弑殺せらる

客殿中ノ間　墨画列仙　等伯筆

禮之間　落彩色 山水　同　筆

檀那ノ間　墨画猿猴　同　筆

龍源院ノ額　朝鮮人梅屋筆

北
〇大僊院　正法大聖禅師古岳宗亘和尚塔所本山の北にあり故に北派といふ永正年中に建

客殿中ノ間　墨画山水　相阿弥筆

禮ノ間　墨画耕作　狩野雅樂助筆

檀那ノ間　彩色花鳥　古法眼筆

衣鉢ノ間　墨画祖師之圖　同　筆

大書院　朱買臣西王母 大公望　同　筆

庭中名巖有二十箇　林泉　相阿弥作

法螺石　布袋石　神鞍石　観音石

沈香石　寶山石　伏虎石　釣舟石

臥斗石　仙帽石　拂子石　併盟石

佛子石　獨醒石　明鏡石　不動石

盂亀石　座禅石　真珠石　扶老石

南日暮御門ノ内
〇興臨院　佛智大道禅師小溪紹怤和尚塔所天文年中
能州畠山左京門佐義綱建立法号興臨院
傳為徳龍天文十九年七月十二日卒
加州太守大納言前田筑前守菅原利家卿重修次法号
高徳院殿一位慶長四年閏三月三日卒六十二歳

客殿中ノ間　墨画山水　古法眼筆

禮ノ間　彩色花鳥 麝香猫　同　筆

檀那ノ間　彩色　土佐光信筆

興臨院ノ額　爲ニ日本國天啓和尚ノ　大明梅屋方伯行書ス　凡十六字アリ

南○瑞峯院　普應大滿國師徹岫宗九和尚塔所　興臨院の南に在　天文二年大友左衛門督義鎮造立　義鎮ハ大友修理大夫義鑑の男　天正十六年五月廿三日卒　五十八　号ニ瑞峯院休庵宗麟ト

客殿中ノ間　墨画七賢四皓巣父許由　古法眼筆

禮ノ間　著彩色花鳥　松栄直信筆

檀那ノ間　彩色堅田圖　土佐光信筆

瑞峯院ノ額　後奈良帝宸筆

北○聚光院　方丈の北にあり　祖心本光禪師笑嶺宗訢和尚塔所　永禄九年三好左京大夫義継父修理大夫長慶のために建立す　長慶ハ永禄七年七月四日卒す　阿讃土の四州及び泉河の二州等を領す　義継ハ天正元年十一月六日河州若江にて信長のために自殺す

客殿中ノ間　墨画松竹梅芦雁　狩野永徳筆

禮ノ間　墨画山水　同筆

檀那ノ間　瀟湘書画　同筆

北○總見院　白毫院旧跡　建之大慈廣照禪師古溪和尚大悲廣通禪師玉甫和尚の為開祖とす　聚光院の西にあり　天正年中秀吉公右大臣信長公のために建之　信長ハ天正十年六月自殺　四十九才　號ニ總見院殿従一位太政大臣ト　○秀吉公ハ慶長三年八月十八日薨じ　六十三歳

客殿中ノ間　墨画山水　長谷川等伯筆

禮ノ間　墨画山水猿猴鶴　同筆

檀那ノ間　墨画芦雁　同筆

南○黄梅院　是山德禪の西にあり　仏通大心禪師春林和尚塔所　天正十一年中納言従三位小早川左衛門督隆景の造立　隆景ハ慶長二年六月十二日卒す　六十四才　號ニ黄梅院泰雲紹閑ト　隆景の子金吾秀秋ゝ甥輝元相續テ為ニ外護ト

客殿中ノ間　七賢人　等顔筆

禮ノ間　墨画芦鴨　同筆

檀那ノ間　墨画西湖圖　同筆

Placing of rain down box

○三玄院 總見の南にあり勅謚圓鑑國師春屋和尚塔所

淺野紀伊守幸長 森蘭丸長定 森長門守忠政等爲ニ標識ト

幸長ハ彈正少弼長政の男号ス清光院春翁宗雲居城紀州和歌山城領ス三十七万石ヲ慶長十八年八月廿五日卒ス

長定ハ森三左衛門可成の男天正十年六月二日戰死廿三才濃州岩村城主領ス五万石ヲ

忠政ハ蘭丸の弟寛永十一年七月七日卒ス六十七才作州津山城主領ス十八万石ヲ

客殿中ノ間	墨画 山水	等伯筆	
禮ノ間	同 山水	同筆	
勅使間	同 人物	同筆	
北ノ間	同 柳燕	同筆	

○金鳳山天瑞寺 總見の西にあり佛機大雄禅師玉仲和尚塔所天正十六年秀吉公爲ニ先妣贈准三后從一位春巖大夫人ノ開建ス法名天瑞寺宗桂と号ス世ニ稱ス大政所ト文禄元年七月廿五日逝ス八十才

客殿中ノ間	襖金彩色 松一式	狩野永徳筆
禮ノ間	同 彩色 竹一式	同筆

其貳

檀那ノ間　同　桜彩色一式　同筆

衣鉢ノ間　同　菊彩色一式　同筆

大書院　墨画山水　同筆

東ノ間　墨画芦かし三笑圖　同筆

北ノ間　同富士山　同筆

南○正受院（しやうじゆ）　龍翔の南にあり広徳正宗禅師法嗣清庵和尚塔所
蜂屋出羽守頼隆造立　関長門守一政再造

客殿中ノ間　墨画列仙　狩野興以筆

禮ノ間　同山水　同　寿石筆

檀那間　同山水　尚景筆

南○大慈院（だいじ）　瑞峰の西にあり仏国大安禅師天叔和尚塔所
天正年中建立大友左衛門督義鎮の妹見性院。
信長公の女兄安土院。村上周防守義明蓬雲院殿。山口
左馬介弘定梅林院殿。等檀越之

客殿　一式　花鳥山水　等伯筆

Covered bridge

○北 高桐院 大慈廣通禪師玉甫和尚塔所
慶長年中参議従三位細川越中守忠興造立
忠興初メ居ニ丹後田邊城ニ中ニ後移テ豊前小倉城ニ封ニ之十八
万石ヲ其後関原の役ニ軍功あるをもつて忠興の男越中守
忠利を改て肥後州ニ封ニ領ニ五十四万石ヲ
忠利父と従て本州八代城に居。忠興正保元年十二月
二日逝 八十三 葬ニ号ニ松向寺殿三齋宗立居士ト
乃チ玉甫和尚の甥なり

客殿中ノ間　墨画 樹木一式　等伯筆
禮ノ間　柳ニ駒　同筆
檀那ノ間　蠶室圖　閻梁楷真ノ筆写ニ 長谷川五代目等伯也
衣鉢ノ間　千鳥圖　等伯筆
大書院　山水　同筆

○北 玉林院 高桐の南にあり大興圓光禪師月岑和尚塔所
慶長年中曲直瀬法印正琳造之元和
七年回禄ニ及ブ月岑自ラ衣盂を鬻て重建し別ち琳の字を
分ケて玉林と改む

客殿中ノ間　墨画 山水　狩野探幽筆
禮ノ間　同 山水　雲朴筆
檀那ノ間　七賢 四愛堂　永真筆
衣鉢ノ間　琴棊書画　洞雲筆
大書院　墨画 鶴　探幽筆
西ノ間　同 山水　洞春筆
杉戸　一間半 一枚折 松ニ猿猴　一間 二枚 竹ニ鶴　一間 二枚
襖　一間半 二枚　松ニ麝香　不知筆者

○北 大光院 金龍の南にあり大慈廣照禪師古渓和尚塔所
文禄年中造立 正二位大納言秀長卿和州郡山
城及ヒ紀州泉州ニ於テ七十二万石を領ス
元和年中藤堂和泉守高虎当山ニ移ス
○秀長ハ秀吉公の弟 天正十九年正月廿日薨ス 大光院殿
春岳宗栄と号ス 其長男中納言秀俊ハ古渓和尚を師と
して創ニ大光院ヲ
○高虎ハ寛永七年十月五日卒 年七十五歳 号ニ寒松院殿

客殿中ノ間　墨画 七賢四皓　永真筆
禮ノ間　墨画 夏ノ景　同筆
檀那ノ間　墨画 秋ノ景　同筆

衣鉢ノ間　墨画 あしノ系　同　筆

大書院　墨画 其ノ系　同　筆

南
○金龍院 天瑞の西にありて佛性心宗禅師傳叟和尚塔所
慶長年中金森五郎八長近建立し信長公の
冥福に薦め初ハ松和尚に請じて住持なさしむ故
有て当山に擯出して後改て傳叟和尚を請じ
○長近ハ兵部卿法印と号し飛州高山城に居し

客殿中ノ間　山水　長谷川等伯筆

禮ノ間　四愛堂　同　筆

檀那ノ間　大松　同　筆

衣鉢ノ間　山水　同　筆

金龍院ノ額　朝鮮人黄龔筆

杦戸 芦ノ鷺 紅葉ニ鹿　四枚二枚折彩色　等伯筆

南
○昌林院 大雄殿の西にあり旧名霜筠軒法竜大深禅師光南
和尚の塔所文禄年中蒲生飛騨守氏郷同長男
飛騨守秀行建立しかれ父の功徳とし氏郷ハ文禄
四年二月七日卒四十歳奥州会津城主百万石

客殿中ノ間　七賢　安信筆

禮ノ間　山水　同　筆

檀那ノ間　山水　同　筆

北
○龍光院 玉林の東にあり江月和尚塔所
黒田筑前守長政の父勘解由源ノ孝高の為に
造立し長政ハ筑前守福岡城五十二万石元和九年八月
四日卒五十四歳号興雲院殿
孝高ハ天正十四年秀吉公に奉し豊州中津城六万石
慶長九年三月廿日卒五十九歳号龍光院如水圓清

聯芳堂 院内にあり中位に蓮慶像左に圓鑑國師右ニ興宗禅師を安じ又後陽成院六ノ皇子
好仁親王号ニ高松殿一參ニ江月一称ス入室弟子一當院ノ檀
越たりし又吉川美濃守廣正礼ニ江月一向ニ法ヲ其父發人侍従ノ
廣家の遺命をもって立墓於當院廣家ニ居ニ防州岩國ニ領ス六万石
寛永二年九月廿一日卒六十四歳号全光院殿中岩如兼

客殿中ノ間　彦松仙人　等顔筆

禮ノ間　松ニ仙人　等伯筆

檀那ノ間　真山水　等顔筆

衣鉢ノ間　金山寺圖　同　筆

大書院　草山ノ圖　同　筆

杉戸　一間半貳枚　唐獅子四疋　同　筆

北

○芳春院　直指心源禅師玉室和尚塔所　慶長年中加州金澤城主中納言前田肥前守利長の母芳岩夫人建立也夫人加州大納言利家ノ室土方採の助ノ女也元和三年七月十六日逝ス號ニ芳春院芳岩宗富ト又後陽成院第七皇子一條関白昭良公法號慧觀為ニ當院檀越一

呑湖閣　横井氏田屋等造ル　又有ニ絶雲亭步月橋一

客殿中ノ間　唐彩色　祖師圖　探幽　筆

禮ノ間　墨画　獅子牡丹　同　筆

檀那ノ間　唐彩色　四愛堂圖　同　筆

衣鉢ノ間　墨画　山水　同　筆

大書院　唐彩色　花鳥　同　筆

小書院　墨画　山水　同　筆

右二十四塔頭由緒ハ龍寶記を拔萃ス

○寮舎

○龍泉庵　松源院寮舎　陽峯和尚塔所　明應年中多賀豊後守高忠子孫為ニ檀越一

客殿中ノ間　西湖圖　興意　筆

禮ノ間　人物　同　筆

衣鉢ノ間　耕作圖　同　筆

檀那ノ間　梅花　同　筆

大書院　柳本斗画　同　筆

杉戸　一間二枚　竹ニ鶴　二枚　彩色一間　野雉　已上六枚共ニ　同　筆

北

○清泉寺　三玄院寮舎開基實傳和尚中興傳外和尚旧址也にあり茶人ハ宗治の流後ふる本嘯公の藪に接ル其流を隠しゆく湛鎔とりふ慶長年中に立今裁松杉とりつ大僊の画にあり

客殿中ノ間　唐彩色　山水　等伯　筆

禮ノ間　四愛堂　同　筆

檀那ノ間　琴碁書画　同　筆

衣鉢ノ间　山水　同筆
大書院　山水　同筆

○瑞源院　芳春院の寮舎大光の西ニあり江月を開祖とし水野日向守源勝成所造備後福山の城主之

客殿中ノ间　墨絵人物　等益筆
禮ノ间　山水　同筆
檀那ノ间　耕作　同筆

○寸松菴　龍光院子房江月を開祖とし元和七年造立佐久間将監実勝領一万石

客殿中ノ间　曲水　探幽筆
禮ノ间　雪中山水　同筆
檀那ノ间　花鳥　同筆
衣鉢ノ间　西湖八景　同筆
書院　袋棚　蒙求　菜茄子　蒲萄　風　同筆
同　額　風水洞　林道春筆
額　寸松菴　瀧本昭乗筆
廊額　空歩廊　同筆

○梅岩菴　瑞岩院寮舎天祐和尚塔所

客殿中ノ间　松竹梅　狩野興也筆
禮ノ间　花鳥　別不如閑筆
檀那ノ间　八景　同筆
大書院　人物　同筆
衣鉢ノ间　人物　同筆

○高林菴　芳春の寮舎芳春の裡ニあり玉舟和尚塔所慶長中立其後寛永中片桐石見守貞昌再建貞昌ハ和州小泉邑領一万石

客殿中ノ间　山水　探幽筆
檀那ノ间　人物　同筆
禮ノ间　山水　安信筆
衣鉢ノ间　山水　益信筆

大書院　山水　常信筆

玄妙ノ額　後西院帝宸書

○見性庵　隠岑寮舎 三玄ノ門内ニあり 万江和尚塔所 慶長中立

客殿中ノ間　七賢

禮ノ間　林和靖　等益筆

檀那ノ間　眞ノ山水　同筆

夜話ノ間　山水　同筆

○常楽庵　玉林の子庵 古渓和尚所造 後慶長 細川越中守源綱利廣大岸和尚と法しくく重興

客殿　松竹梅一式　狩野永納筆

○孤蓬庵　龍光院子庵 江月和尚為二開祖一 小堀遠江守政一 造立 正保四年二月六日卒 六十九茶

客殿　山水　周信筆

禮ノ間　松竹梅　同筆

檀那ノ間　同　同筆

大徳塔頭

碧玉菴

紫式部碑

書院　山水　探幽筆　此書院ハ直入軒といへり寛永年中小堀善太夫建る所小堀遠州の文字あり

佛間ノ額　孤蓬菴　松花堂惺々翁筆

○碧玉菴　天正年中藍溪和尚開創之花宗禪寺宗嚴種識。居士筑後柳川。領十二万石。林泉藤村庸軒作什寶ニ細川玄旨幽齋所持の文臺硯蓋あり。當寛政十年午の秋九月紫式部の碑碣をあらたに建る古墳ハ雲林院の卯居の方式所許田龍の中にあり都名所圖會拾遺に出せり碑ハ故障ありて尚居に建らく銘ハ畑維龍。由緒ハ井後氏久米女財主を浪花五十川菅正齊田中督榮なり九月中旬碑を建るの日供養の法莚あり觀音懺法奏樂一越調音取賀殿迦陵頻急胡飲酒羅陵王武徳樂伶官七人岡。東儀。林。三家勤之

紫式部碑　扁額隷書

紫姫者、越前守藤為時ノ女也、生而穎悟、才德夙ニ著ル、姫ノ兄惟規嘗讀書、姫在傍暗誦不失一字、父撫其背曰、恨ハ不令汝為男也、為時雅通經史、逎以其學悉授姫、迨年稍長、給事御堂公ノ家、尋侍上東門院、既而適左金吾宣孝、生二女、亡幾宣孝歿矣、姫持操甚堅、獨與其女居、覃思讀書、通五經三史、涉佛老百家、詞藻富贍、逸思如湧、永延之朝、有十才女、紫姫為之冠、內命著編新語、姫乃著源語六十帖進呈焉、外託艷詞、內存諷諭、意匠結構、摛藻婉麗、前無古人、實女史之大手筆也、時之哲匠不能贊一辭也、姫有容色、貴介公子以歌通殷勤、姫拒之、亦以和歌、其詞婉曲、而貞烈不可奪也、其它事實、詳于源語諸註及日記等、卒葬城北雲林院、冢今在院ノ東南數百步、但墳揄存已、今茲寬政乙卯有尼師、傷其冢ノ日就荒廢、募緣四方同志建之碑、令維龍銘焉、

銘曰、
猗与斯人　窈窕淑貞　闡徳斯美
若揺若瓔　雲鬟霧髩　歛采搸荆
彤管之煒　日星皚明　爰建爰勒
永存令名

寛政七年歳次旃蒙単閼小春日

鶴山畑維龍子蠖甫識

紫式部のつくれる物かたりはいとも世に名をあらはし
物しらぬ人の世にもれなるなしとなむ今の人のいふ
これ寛政五年の秋菜よりはしめて家の上
に建けるを碑にて書はしめたるなり
よのつねさまには過来君はなり（?）おもて物の

紫式部みつからの玉は露にしたしみつつ　書肆某
乃つめても月日中古の道に編あつめて論語
をまむの作者にしてまれつもいよいよあきらかに人名
もあらはしつるをほめそなへ世のためを含
るれはかしこき語をあらはしその後に猶尽ぬるこ
の新たに四手はくくに知るゆえ碑ともいとなむなり
人まゝ東の宮にに道にて学道もあらはすなり
畑維龍のめよりも諸たの名はやまれと志すよし
をも出す字の乃さてやまい好の手はいようし尽めいく人
以はく給ふ女なる西の方のめし紀事乃ゆしやとあへるて
いよいよはかるなる事もまたやくもういましもいの
人にの手向にも世にゆく此法の物まくしそと都にも東のゆくに
きなつく人まかる林修斎の都よりよれ彼の事なる特士

これや遠江ことを思ひてそのしくらく中よむもちて念
ふくく制かよみ尼の宗としも物いくよくの絶せしのふ計らめん
れむきに行ろ尽八つよさも世よ代事ら中深とも聖の歌　井後氏　久女子

○當山之寮舍子菴名画名筆頗多し繁によりてまゝ其略に

龍翔寺
旧西京安井村にあり應仁の火後廢絶今大徳寺寓法堂正受の右に在り開山南浦和尚入宋虚堂和尚に法嗣次延慶元年十二月廿九日寂す七十四歳謚圓通大應國師一宋より帰朝の後興徳万寿建長等に止錫し又西京龍翔豊後の圓福城南の妙勝等師を奉じて開祖とす

客殿
小栗宗丹筆
墨絵　花鳥

南方
同筆
著彩色　花鳥

引接寺
千本通北極にあり號ら千本閻魔堂といふ寺前に櫻花あり花の時大念佛を修す縁源信僧都の弟子定覺たり

本法寺
小川頭にあり日蓮宗十六本寺の其一なり林泉は光悦の作にして世に三巴の庭といふ賞ぞ其形築山泉石共に浪の紋を模す什寶に三幅対の名画あり中央観音月壺の筆左は許由張芳汝の筆右巣父同筆又鶏頭草の絵は舜擧の筆貝盡の絵は趙昌の筆又ことに當寺の寺宝に光明皇后御筆の法華經又小野道風の法華經あり本阿弥光悦の添翰あり羅漢の像は種々あり明兆雪舟古法眼等の筆又宗門に入日蓮日親等の筆並数離あり又名筆あり其銘を松風といふ中華より傳來といふ其外数品あり因る摩利支天の画像あり筆者詳ならず足利尊氏の副翰あり

其文云

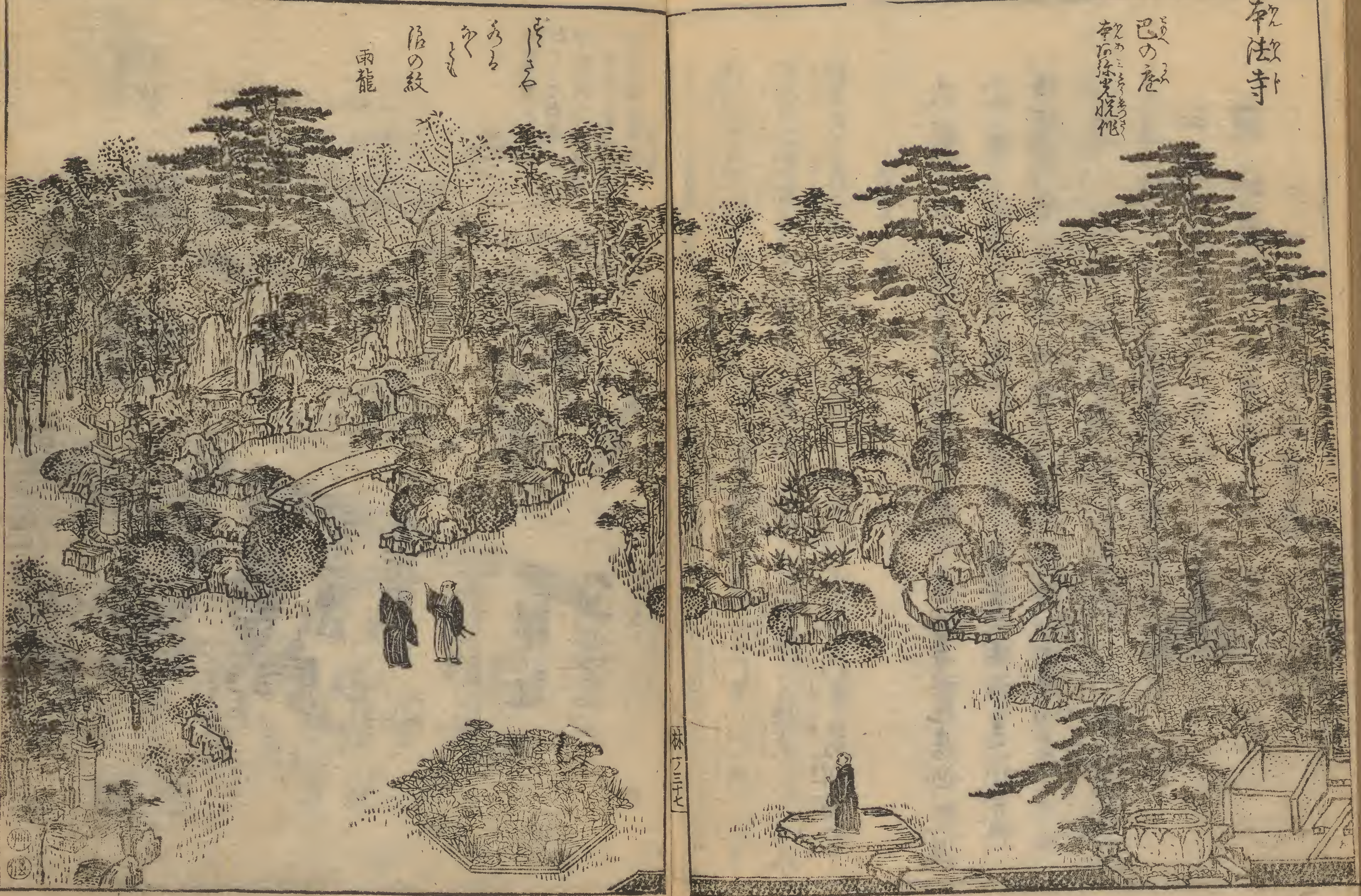
太現明王者合戦本尊也黄石公授子房公尊也匡房卿授源義家之氏尊又名摩利支天當家傳之項羽時項羽軍強シテ高祖度々討為ル此時張良氏尊高祖ニ合戦セシヤ高祖ヲ傳奉リシカハ欲強キ雖氏此尊ノ帥ヲ行為ニ持スハ欲自ラ退散何況ヤ本尊ノ威光ニ依テ吾儕ツラ無不開眉カラ矣

正慶二年十一月

護帥檢役口傳申や

足利大和守殿

氏（花押）


本法寺
巴の庭
本阿弥光悦作
すゞしさや
あらし
ふくとも
浪の紋
雨龍

千本焔魔堂大念仏
焔魔堂上
狂言奇念佛
櫻花開落時諸婆
千本日藏夢即今
忽笑寧馨兒
籬嶌
大念佛閣